

説教「御子による豊かな恵みす」

詩編三一・八〜九

エフエソ 一・七

牧師 森田恭一郎

エフエソ書を読み始めました。エフエソ書の大
きな主題は「教会はキリストの体である」(エフエ
ソ一・二三)ということです。キリストが教会の頭、
教会がキリストの体です。そこで一連の説教では、
キリストの体である教会に私たちが連なっている
幸いを、エフエソ書から自覚し受けとめたいと思
います。前回は一章三節でしたので、四節から順
に読んでいくところですが、四節以下は来月の召
天者記念礼拝の時に味わいたいと思いますので、
今日は途中スキップして、一章七節を先に味わう
ことにします。私たちはこの御子に於いて、その
血によって贖われ、罪を赦されました。これは、
神の豊かな恵みによるものです。

私たちは贖われ罪を代わりに負って戴き、罪を
赦して戴いたのですが、それは御子に於いてです。
私たちはキリスト教徒ですが、キリスト抜きにキ
リスト教徒にはなりません。教会はキリスト教会
であり、信じるのはキリストを信じます。神様を
信じるという言い方もしますが、それはキリスト
に於いて御自身を現れされた神様を信じます。何
度も申し上げてきたことですが、洗礼試問会で、
神様を信じます、だけでは洗礼を授けられません。
キリストを信じるのです。私たちが、血によって
贖われ、罪を赦して戴いたのは、御子に於いてで
す。御子キリストの十字架は私のためであった、

その表明がなければ洗礼を授けることは難しい。
それは、私たちの救いが御子キリストの十字架と
復活によるからです。そしてこの事さえ受洗志願
者が確認出来ていれば、他のこと、まだ聖書は殆
ど読めていないとか、自分の性格は良くないとか
行いも大して善いことはしていないとか、他のこ
とは二の次で良いのです。御子に於いて、これを
知るのは、どれほど瞑想を深めても悟りを求めて
も自分からは出てきません。教会に連なつて、キ
リストをほめたたえる礼拝に集い、説教を通して
キリストを知る御言葉を受けとめてこそ、開かれ
る視点です。そうやって、自分の救いが御子キリ
ストの十字架と復活による、と認識できれば、信
仰の基本は告白した、洗礼を授けることが出来ま
す。それで良い。私なんか、と思う必要はない。
大胆に受洗を申し出て欲しいと願います。御子に
於いて、これを心に留めましょう。信仰者もこれ
があれば基本的に信仰者です。

次に、その血によって。キリストが十字架で血
を流されたことを語っています。これは今から二
千年ほど前にエルサレムのゴルゴタの丘で執行さ
れた歴史の出来事です。そしてその出来事の意味
は、ただイエスという男が処刑されたというので
はなく、その血によって贖われ、罪を赦されまし
たという、そこに含まれていた意味がある。意味
を受けとめるのがキリスト教信仰であり、その意
味は贖いと罪の赦しです。

贖いは、買い取って自分のものにすることです。
通常はお金で買い取りますが、キリストの血をも

って買い取った訳です。キリストが私たち一人ひ
とりを御自分のものとして下さり、大切に下さ
さる、何と慰め深いことでしょう。この地上でも
天上でも変わりません。

罪を赦された。聖書には似た言葉があります。

過ちと罪(エフエソ諸一・一)。過ちは、ある説明
によりますと、直訳は脇に倒れる。そこから踏み
外す。小さな具体的な咎を表します。罪は、投げ
槍の的を外す。咎を引き起こす本質的で根本的な
神と人間の関係を指す用語です。そこから考えて
ると、例えば、人間って自分中心で罪深いねと言
う時は、誰もが抱えている本質的な、神の方を向
いて神を中心にする、それが出来ない外的の罪。
他方、過ちは、外に現れた具体的な悪い行い。
あんな人、赦せない、と私たちが思うのは、あんな
人の具体的な行いを見て、赦せない、と言っている
ことが多いと思います。

七節に戻りますと、話はややこしいのですが、
ここに出てくる、罪を赦されましたの罪は、先ほ
どの過ちという用語です。何か意外に思いますが、
実際私たちが相手の罪にこだわり赦せないのは、
行いとなつて外に現れた過ちです。

そして一方が相手の過ちを赦すのも、他方が悔
い改めるのも、私たちはなかなか出来ない。どち
らの立場にあるとしても、何よりも祈ることが必
要です。主イエスがこう言われたことを思い起こ
しましょう。どんな願い事であれ、あなた方の二
人が地上で心を一つにして求めるなら、私の天の
父はそれを叶えて下さる(マタイ一八・一九)。

今日はこの主イエスのお言葉も思い起こしたい。

エフェソ書の過ちを赦して下さると同じ表現で語っておられます。また、立つて、祈る時、誰かに對して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなた方の天の父も、あなた方の過ちを赦して下さい（マルコ一・二五）。

具体的行為となつて現れた過ちを巡る文章です。ここで、相手の赦して下さい、とは言わずにあなた方の過ち、と言っておられるのは意外に思えます。赦す方も謝る方も、そこで赦せない、謝れないならば、主イエスからご覧になれば、同じように悩みの中にある。それを主イエスは、御自身の血によつて贖い、赦して下さるのです。

七節はこの贖いと赦しを、これは、神の豊かな恵みによるものと語ります。恵みは一方的なプレゼントです。手柄を前提にした褒美ではありません。贖いも赦しも、何もないところから人間が出来る事ではありません。悔い改めも、人間として謙虚になれば出来るという事ではなく、キリストの贖いと赦しに顔を向ける回心から、神に對して、また具体的な誰々、人に対して起こつてくる、聖霊の御業です。

終わりに、恵みという言葉からもう一つ。恵みは贖いと赦しだけではない。全てが恵みによる、ということを受けとめたい。人間の業によつて社会の営みは成り立っています。善い業を行うと、価値がある生き方が出来た、などと考えます。でも生き方以前に、生きているというのは、恵みです。活かされている、という表現にもなります。恵みによつて生かされていることを、尊厳と言います。

ます。

この礼拝も私たちがささげる礼拝という言い方が出来ますが、聖霊なる神様が恵みによつて、礼拝を整え、私たちをここに招いておられます。今日も礼拝の場に招かれたということ自体、恵みによるのであつて、聖霊と、礼拝に招かれたこと自体に敬意を表すことをわすれないようにしたいだと思ひます。教会に連なる幸い。これは、神の豊かな恵みによるものです。